

# 母（シド）なき世界

—コレット後期作品を中心に—

## Le monde sans Sido

—les dernières œuvres de Colette—

村 上 舞

Mai MURAKAMI

### はじめに

私はこれまでの論文において、コレット作品の女性主人公が、いかにして異性愛の破綻から脱出し、自然・動物へ傾倒し、そこに生きる道を見出していくかという過程に注目して、コレットの作品をいくつか取り上げてきた。その中で『夜明け』という作品は、単に男性との関係に見切りをつけるのではなく、動物・自然の力を得て、母性的な「動物的エクリチュール」を獲得し、新たな作家としての出発となる夜明けが到来することで始まる小説であることを論証した。そして『夜明け』の自然は、母とその母の思い出と密接に結びついた自然ではあるが、単に女性的だというだけではないこと、すなわち、「私」は自分で耕すという、自ら自然の中に入り込む能動的な働きの中で自分が男でもあるような両性具有的体験をすることを明示したのであった。初期のクロード・ヌものから始まった、異性から逃れて、自然・動物に心酔する女性を主人公とした教養小説の流れにおいて一つの到達点に達し、その特質は両性具有的世界であると結論づけた。自然の中に母シドを見出し、両性具有的世界へと踏み込んでいくこの『夜明け』という作品は、異性愛から逃れた女性主人公の辿り着いた終着点であると考えられるが、一方でこれ以降もコレットは作品を書き残しているという事実はどうみるべきだろうか。そこで、今回の論文では『夜明け』以降のコレットの小説で、異性愛の破綻がどのように扱われているのかを見ていこう。

対象となるのは、コレットの思い出話を除き、コレット自身が投影されていると思われる小説で、『第二の女』、『デュオ』、『トゥットゥニエ』と『ジュリー・ド・カルネラン』の四作品である。そして今回取り扱う小説に共通しているのは、まず恋愛もしくは夫婦関係が破綻しているということ、そして母シドが登場しないというこの二点である。異性愛というものが、自然や母シドの世界に昇華されるのでないのなら、どのようにして、どのような形で主人公によってその破綻が乗り越えられていくのかを見ていきたいと思う。

### 1. 女性同士の連帯

#### 1-1 反感から連帯へ

『夜明け』以降のコレットの小説において、男性関係の破綻した女性主人公の関心が向かう先は、他ならぬ女性のようなだ。まず、浮気性の劇作家ファルーとその妻ファニーと、秘書ジェーンとのいわゆる三角関

係を主題とする『第二の女』を見ていこう。夫ファルーと秘書ジェーンの浮気の実事を知ったファニーは、当初はジェーンに対し裏切られた思いから反発を抱いていたが、徐々に妻ファニーは破綻した男性関係の救いを女性同士の連帯に見出していく。

彼女 [= ファニー] は、女性たちがわがものにすることのできる男の分け前を見積もろうと努めながら、強情な何組かのカップルのことを検討してみた。

「ふうん... 彼女たちが持っているもので一番確実なものは、彼女たちが自分たちの男のことを話し、男について愚痴をこぼし、自慢し、男を待つということ。だけど、彼女たちがこれ見よがしに見せているものすべて、男性の現存と、存在なしに済ますこともできるだろうに...。」

信者たちが神を待ち、子供っぽく信仰することでしか存続しない純粋な宗教の残存物をけなしたのだと理解し、彼女はある連帯、不安定で、少し危険で、男によって絶えず崩壊させられ、男を犠牲にしていつも作り直されるものであったとしても、女性同士の連帯からしか生じないひとつの救いの方へと引き返した<sup>1</sup>。

ファニーにとって、男性の権威を重んじる女性は「信者たち」であり、その「信者たちが神」と呼ぶのはつまり男性であるという。そして、その女性の「信者たち」が、神を待つようにして男性を待つことを「宗教」と規定する。その上で、夫ファルーに辟易するファニーは、男性との関係のうちに生ずる懊悩からの「救い」を「宗教」にではなく、「女性同士の連帯」の方に求めるのである。

また『第二の女』の続編にあたる『デュオ』においても、女性主人公がはじめ反感を抱いていた女性と融和し最後には連帯するという主題が反復されている。『デュオ』は妻アリスの一度の浮気が夫婦関係の不和を惹起し、妻アリスへの不信と暗い激情に苛まれ続けた結果、夫ミッシェルが自殺に至るという物語である。夫との不和を契機に、女性主人公妻のアリスは今まで敵対していた女中マリアに歩み寄り連帯する。

彼はドアの閉まる音で振り返った。アリスは、ミッシェルからも、天気の話から、鉛色のどんよりした時間からも逃げて、台所の方へ走った。暑い台所には、ばら色をした銅の台所用品が用意されており、彼女はほっと溜息をついた [略]

両足の本靴を地面に引きずり、たくましくも気力をなくした背中に、土色で厚手のビロード上着をぴたっと羽織った男が、魔女の腕によってかき立てられ、追い出されて、台所から離れた。マリアの夫が空けた椅子の上に、アリスはほんのひと時座った。「なんて気持ちがいいのだろう... とろ火でゆっくり煮ている料理、赤熱したかまど、頭にのぼる気持ちのよい熱気... この痩せてひよろひよろした雌バツタは、生気のない雄バツタを操っている... なんてすべてが人間的で、正常で、感じがよいのだろう！ 女中は私が好きじゃないの？ [略] 私はここにいたい<sup>2</sup>...」

夫ミッシェルから逃れるために、アリスが真っ先に向かった先は、マリアのいる台所である。またマリアも、自分のいる台所に逃げ込んで来たアリスを受け入れ、そこに一緒に居合わせた夫を腕で追い払い、自ら女性二人だけの空間を作り出している。アリスはそれまでマリアのことを「好奇心に駆られた裏切り者の百姓女<sup>3</sup>」と形容し、敵意を示していたが、夫から逃避し辿り着いた先はライバルであったはずの女

<sup>1</sup> Colette, « Romans - Récits - Souvenirs », Robert Laffont : *La Seconde*, Hachette, Paris, 2004, p.1162-1163. 以下、翻訳は拙訳による。

<sup>2</sup> Colette, « Romans - Récits - Souvenirs », Robert Laffont : *Duo*, Mercure de France, Paris, 2004, p. 1163. 以下、下線は引用者による。

<sup>3</sup> *Ibid.*, p. 68.

性、女中のマリアであり、アリスが「ここにいたい」と思う場所はマリアのいる場所なのだ。

このように『第二の女』のファニーも、『デュオ』のアリスも、女性主人公が女性同士の連帯へ向かうこと、これが男性との関係から脱却するための処方箋として提示されていることがわかる。

## 1-2 連帯

ではその女性同士の連帯が『第二の女』と『デュオ』でどのように描かれているかを、作品別に詳しく観察してみたい。

まず『第二の女』における女性同士の連帯について見てみよう。秘書ジェーンは女性主人公ファニーに、自らの心情を次のように吐露する。

— [略] ファルーは男、魅力ある男、有名な男で、才能溢れる男よ。要するに、ファニー、告白してしまえば、私のような女を魅惑するのにさほどたいしたものはいらないのよ、身持ちを良くして、慎ましく、孤独でいる理由なんて少しもないのだから…。[中略] でも、結局、ファルーがファルーであることを別にすると、男として特別なところは何もないのよ…。一方であなたは、ファニー、あなたは…。[中略]

—あなたは、ファニー、あなたは女性としてずっと素敵なのよ、ファルーが男としてそうであるよりも。ずっとずっとね<sup>4</sup>…。

ジェーンは、ファルーを男という性の一般的な範疇においてしか価値を認めていないが、それに対しファニーは「女としてずっと素敵」だと言っているように、女という性の範疇の中でも優位に立つ存在として位置づけられている。

またジェーンは自分とファルーとファニーの三角関係について次のように言う。親愛の情が込められている。

—私が言いたいのは、幸いにも、そこにあなたもいてくれたということ…。彼と同時に…。ファルーと一緒にだととても孤独を感じるのよ…。[略]。私はファルーに全然感謝なんかしていない。まったくもってそう。ただどこにいる誰かさんには感謝しているの…。[中略]

— [略] 四年前から、私はファルーよりもあなたのことをずいぶんと考えた<sup>5</sup>…。

ジェーンは三角関係であれば当然抱くであろう嫉妬やライバル心など一切見せず、それどころかファニーに対して「感謝」さえている。同性愛的感情さえ感じさせるようなこのジェーンの告白は、性的には異性愛を対象としているものの、ファルーが自分に与える身体的満足は感謝に値するものではなく、心的な側面において重きを置いているのはファニーとの関係性にあることを強調している<sup>6</sup>。

ジェーンがこのような同性愛的な真情を吐露していることから予想されるように、『第二の女』ではジェーンとファニーが身体的に接触するシーンが多く見られる。

彼女は [= ジェーン] は、通りがかりに、ファニーに飛びかかり、どこでもあちこち、もったいぶった軽いキスで、包み込んだ。ファニーは嫌悪感も不快感も覚えなかった<sup>7</sup>。

<sup>4</sup> Colette, *La Seconde*, p. 1147.

<sup>5</sup> *Ibid.*, p. 1145-1146.

<sup>6</sup> 小野ゆり子、『娘と女の間』、中央大学出版部、1998、p.172-p.174.

<sup>7</sup> *Ibid.*, p. 1075.

ジェーンの求愛とも受け取れるような振る舞いに対し、接吻で返すようなこともなくファニーはあくまで受動的な姿勢ではある。しかしながら、異性間に見られるようなジェーンの行為に「嫌悪感も不快感も覚え」ていないファニーは、抵抗もしてなければ、疑問も抱いておらず、ファニーを受け止めているのだ。

また、ファニーが風邪かもしれないとジェーンが心配し、服を着替えさせようとする時のジェーンの反応は次のようである。

ジェーンの手が服のホックを探し求めている時、ファニーの乳房にそっと触れた。敏感な女のようにびくっとなるのを抑えられなかった。恥ずかしそうに彼女は目を開けた<sup>8</sup>。

ここでは、能動的なジェーンの行為と受動的なファニーの姿勢とは状況が違い、ファニーを心配するジェーンの献身的な看病の最中での偶然の接触であるにも関わらず、ファニーは、敏感に反応し甘受している。ファニーはジェーンを意識しているのは明白で、二人の女性同士の連帯は同性愛的だと言えるだろう。

では、『デュオ』の女性同士の連帯はどうだろうか。先の引用で一度ミッシェルの部屋を飛び出し、台所でマリアに救われたアリスは、もう夫と一緒に出掛けることすら考えられない。

「私は、今日一人であの森の中へ探検に出掛けたくない。そしたらミッシェルと一緒に？ それもまた嫌だ。」

ほっと落ち着くために、彼女はマリアがフェルトの上履きを履いて床を掃除している音に耳を傾けた。拍子を取りながら肉の落ちた褐色の腕をぶらぶらさせ、山羊のような両足をはさみの動きのように踊り、女中は、池の水面の上にいる水ぐものように、ナラ材の床の上を動き回っていた。ささやかな喜びを感じ、アリスはフェルトの上履きの足音にこだわりいつまでも聞いていた。彼女はすり鉢の中ですりこぎがたてる音も、玄関でのほうきで掃く音も、まな板の上にある肉ひき器の音も、マリアの存在を示すすべてのしるしが好きだったのだ<sup>9</sup>...

夫ミッシェルとの外出を想像しただけでも嫌悪感を抱き、その気持ちを沈めるためにアリスが必要とするのは、やはりマリアの存在である。マリアが家事をする時に立てる音に耳を澄ませ、マリアの存在を聴覚で感じ取り、そのことにアリスは「ささやかな喜びを感じ」ている。「ほっと落ち着く」とあるように、アリスの存在が、夫ミッシェルとの関係悪化によって荒れたアリスの心情を癒してくれる役割を果たしている。そして二人の女性は、二人きりになれた瞬間次のように「感動」を覚える。

一人は座り、もう一人は立っている、彼女たち二人とも、初めて彼女達だけでいることを思い、奇妙な感動を覚えていた。

「なんて奇妙なの... 初めてだなんて。私たち二人の間にはいつだってミッシェルかマリアの夫か洗濯する家政婦がいたり、窓ガラスを洗うためのはしごかジャム用銅製鍋がある<sup>10</sup>...」

はじめにアリスが夫から逃れ、マリアに救われた場所である台所で、女性同士二人は連帯を強めることになる。次の引用は、アリスがマリアの火傷に気づき、手当をする場面である。

<sup>8</sup> *Ibid.*, p. 1115.

<sup>9</sup> Colette, *Duo*, p. 1168.

<sup>10</sup> *Ibid.*, p. 1170.

立つと同じくらいの身長で、彼女たちは控えめな声でおしゃべりをしていた。アリスは、話をしながらトーストしたパンの角をかじっていた。コーヒーの苦い香りが彼女の乾いた口を湿らせ、彼女は体力回復の休憩をとっていた。

— なんてすべてが清潔で、予想どおりなんだろう、ここではすべてがなんて女性的なのだろう...

— [略] マリア、それを取りなさい。わたしがすごい糊膏（ここう）を塗ってあげるから

— 「わたしの台所で！」 [略]

— 「もちろん、あなたの台所で」 [略] 彼女たちは互いに見つめ合った。 [略]

— 「痛くない？」

マリアは首を振って答え、あらゆる感謝を述べた。

— 「立派な仕上がりです、奥様、とても速やかでしたわ！」

そして、彼女は袖をおろす前に、産着でくるまれた生まれたばかりの子に対してするように、傾けた頬を白い包帯に押しつけた<sup>11</sup>。

女性同士で語り合う台所はファニーに力を回復させる「女性的」な場所であるようだ<sup>12</sup>。台所は二人にとって、出会いの場であり、二人きりになれることに初めて感動を覚えた場であり、そこで語り合い、見つめ合い、「産着でくるまれたばかりの子に対してするように、傾けた頬を白い包帯に押しつけた」とあるように、二人が触れ合う場、女性同士の連帯がより強固なものとなる場のようだ。

## 2. 女姉妹と過ごした子供時代への回帰

### 2-1 カナベとベッド

前章では女性主人公が、男性との関係の破綻を契機に、ライバルであるはずの秘書や女中といった家庭内にいる女性と、連帯関係を結ぶに至る段階を見てきた。本章では、夫婦関係に不協和音が生じ、女性主人公が女性に救済を求め、女性同士が連帯するというテーマが類似している『トゥトゥニエ』を取り上げ、『第二の女』や『デュオ』における連帯と異なる点を中心に見ていこう。

『トゥトゥニエ』における女性主人公アリスの女性同士の連帯とは、本質的に姉妹愛的なものである。『デュオ』の中で、アリスは姉妹たちとの生活を次のように回想している。

クランサックの丘を越えて、彼女はパリの古い家になっこり微笑んだ。思い出の中に、親密な姉妹愛の言葉に尽くせない喜びの中に逃避した。身体的にも精神面にも類似しているという、ソルフージュとピアノの先生だったワード家の父の四人娘を、昔結びつけていた純粹で大胆な仲間意識という喜び。それは、双子姉妹のような連帯で、おそらく同じ日に同じお腹から生まれた動物達が感じ取るような愛情だった。[中略]

「[略] ミッシェルが町で城主のように振る舞っている不在の間を利用して、私はあなたたち三人と一緒に、私たちの生まれた長椅子の上に寝転がります<sup>13</sup>。」

アリスの楽しみは「親密な姉妹愛」に基づいていて、その姉妹の結びつきは「純粹で大胆」でもあり、「双子姉妹のような連帯」だと言う。さらに、アリスの姉妹間の関係性は「同じ日に同じお腹から生まれた動物達が感じ取るような愛情」に喩えられており、極めて緊密な動物的連帯感が強調されているのがわか

<sup>11</sup> *Ibid.*, p. 1180.

<sup>12</sup> 小野ゆり子、前掲書、P. 184-185.

<sup>13</sup> *Ibid.*, p. 1158-1159.



る。また、彼女たちは『トゥトゥニエ』という表題となった Toutounier (おいぬちゃんのベッド) と呼ばれるに寝椅子にちなんで、姉妹達は自分たちを「トゥトゥニエール (おいぬちゃんベッドの娘たち)」と呼んでいる。彼女たちにとってトゥトゥニエは、この引用に「わたしたちの生まれた長椅子」とあるように、そこで共に生まれ、育ったような強固な姉妹愛的連帯の象徴なのだ。

そして『トゥトゥニエ』は『デュオ』の続編であるが、『デュオ』には『トゥトゥニエ』の前段階とも言える場面が存在する。

—私の助けとなってくれるのは、マリアしかいなかったのよ。[略]

—まったく、それは驚いた、アリス！ マリアって、あなたはあの抜け目のない婆さんはミッシェルのお気に入りのお女だって常々言ってたじゃない！

—そうよ！ [中略] それがとにかく変わってきたのよ、ミッシェルがいなくなるより以前からさえね。[中略] 彼女は客間で私のそばで寝てくれたわ。私は長椅子の上に、彼女は修道女みたいな大きい寝間着を着てもう一つの長椅子の上で寝たの<sup>14</sup>。

夫ミッシェルが自殺し、完全に夫との関係に終止符の打たれたアリスが寝る場所を選んだのは、夫ミッシェルとのベッドではなく、長椅子 (canapé) であり、それは姉妹との思い出に結びついたトゥトゥニエを彷彿とさせる。そしてマリアと「そばで寝て」いる姿は、先の引用で「あなたたち三人と一緒に、私たちの生まれた長椅子の上に寝転がります」とあったように姉妹と寝る姿に酷似しており、『デュオ』の時からもうすでに異性愛の象徴としてのベッドではなく、長椅子の上での姉妹愛的な連帯の兆候が現れていたといえよう。

トゥトゥニエが姉妹たちの関係の象徴であることがわかったが、では夫婦のベッドはアリスにとってどのようなベッドだったのだろうか。

クランサックで、永久に横たわったミッシェルと直面して以来、彼女は、眠りと快樂に到達できないベッド、ミッシェルのベッドというイメージに逆らい、力の限り嫌悪を示してきたのだ<sup>15</sup>。

アリスにとってミッシェルのベッドは、休憩するというベッドの持つ本来の役割もなければ、ベッドの上で男女間の触れ合いによって生じる「快樂」さえ得られないものなのである。

また語り手は、トゥトゥニエで姉妹たちと一緒に眠るアリスを描写しながら、男女のためのベッドと姉妹たちのためのトゥトゥニエを次のように比較している。

生きた人間による体の接触は、夫婦のどんな思い出も彼女に想起させなかった。ミッシェルと結婚した彼女は、愛の時間以外には、ツイン・ベッドしか認めなかった。時々、ミッシェルのそばで不意にうとうとし、自分の眠っている場所を忘れ、群れの誰かに話しかけることがあった。「つめてよ、コロンブ… ビズート、何時？…」でも、生まれた所のトゥトゥニエでは、彼女の眠っている横で女性の大きな腕が落ちてきても、アリスは一度も「ほうっておいて、ミッシェル…」と、ため息まじりに言わなかった<sup>16</sup>。

<sup>14</sup> Colette, « Romans - Récits - Souvenirs », Robert Laffont : *Le Toutounier*, Hachette, Paris, 2004, p. 1384.

<sup>15</sup> *Ibid.*, p. 1401.

<sup>16</sup> *Ibid.*, p. 1437.

アリスにとって夫婦のベッドが姉妹たちを想起させる一方で、「生まれ故郷のトゥトゥニエ」の中に男女関係の記憶が呼び起こされることはない。また、夫婦のベッドとしてアリスが唯一認めたのは「ツイン・ベッド (les lits jumeaux)」だけであり、それは姉妹たちの間の先の引用にあった「双子姉妹のような連帯 (Une solidarité de jumelles)」を感じていたかったからではないか。このように夫ミッシェルと結婚生活が順調の時さえ、アリスが発する寝言は姉妹の名で、夫婦のベッドでありながらも自分はトゥトゥニエの上にいる気持ちでいる。したがって、男性との関係が破綻した後にアリスが求めるものは、トゥトゥニエであり、そこで姉妹と一緒に寝ることなのである。

ただね、昨日の晩、私は仮の住居にいることに急に嫌悪を覚えて怖くなったの。だからここに戻ってきたのよ。この「トゥトゥニエ」、あんたと一緒に同じ長椅子で眠ること... [中略] それこそが私の必要としたことなのよ<sup>17</sup> [略]。

仮の住居とはここでは夫ミッシェルと過ごした思い出の家であり、そこから逃げるようにしてアリスが向かった先はやはりトゥトゥニエで、姉妹たちとそこで一緒に眠ることが、自分の欲しかったものと告白するのだ。

また、アリスだけでなく姉妹たちにとっても、姉妹同士の緊密な関係性の象徴であるトゥトゥニエは特別なものである。アリスが恋人と性的な関係を結ぶ場所がないと語る姉のコロンブに、冗談でトゥトゥニエを使うよう勧めると、コロンブは次のように怒りを露にする。

コロンブは憤然として立ち上がった。

—「トゥトゥニエの上ですって！」と彼女は声を荒げた。トゥトゥニエの上でそれをするなんて！ むしろ一生我慢したほうがいいくらいよ！ こんなにも純粋な私たちのトゥトゥニエ<sup>18</sup>...

姉妹たちの象徴であるトゥトゥニエは「純粋」で、アリスの姉妹たちはそれぞれに恋愛をしているにもかかわらず、男性との関係は、姉妹愛的な連帯と比較すると不純なものと把握されるのである。

## 2-2 動物性

『トゥトゥニエ』において、姉妹たちは実にしばしば身体的に触れ合い、また同じベッドで四肢をからめて眠ったりする。

コロンブはこれを最後と一度咳払いをし、最後のたばこをもみ消し、トゥトゥニエの背もたせのところまで後ろに下がった。アリスはライトを消し、横になって、膝を少し曲げた。男用のパジャマを穿いた、二本の長い脚が、アリスの脚にぴったりとくっつき、 そうしたらほとんどすぐに、寝入った姉の長い息づかいが聞こえてきた。[中略] 冷たく柔らかな髪の毛が、コロンブの額から、アリスのうなじへと滑り落ちた。 彼女はこの触れ合いを、涙が出そうなほど親密な感謝をもって受け取った<sup>19</sup>。

脚をぴったりとくっつけ、そしてコロンブの髪の毛が意図的ではないにしろアリスの首筋に触れただけで、アリスは「涙が出そうな」、とあるように少々大げさに感じるほど喜びを感じている。

<sup>17</sup> *Ibid.*, p. 1405.

<sup>18</sup> *Ibid.*, p. 1436.

<sup>19</sup> *Ibid.*, p. 1436-1437.

そしてこの女性同士に関係性における身体的接触は、しばしば動物性と結びついているようにみえる。

アリスが手を伸ばしたのは、それはコロンプの髪に触る喜びのためだった。濡れてなでつけているときなんかは、アリスが言っていたが、まるで馬の脇腹のようにすべすべしているのだ<sup>20</sup>。

アリスによってコロンプの髪の毛は馬の脇腹に喩えられており、姉妹同士の身体的接触が動物性と結びつき、それがトゥトゥニエの上で生じる事態であるということは注目に値しよう。すでに引用したように、トゥトゥニエの上で生まれ、そこで誕生した姉妹達は、まるで自分たちが動物であるかのように描かれていた。したがってトゥトゥニエは姉妹達にとって、動物性と結びついた幼年時代を思い起こされる場となるのだ。

「トゥトゥニエ... ねぐら、洞穴、人間から成るそれらのしるし、壁についた控えめな痕跡、あの不潔ではない怠慢<sup>21</sup>... [略]」

アリスはトゥトゥニエを小動物の巣の意味もある「ねぐら (le gîte)」、や「洞穴 (la caverne)」といった、動物が休む場所であるような言葉で表している。アリスがトゥトゥニエの上で休む自分を含む姉妹達を動物に見立てているようである。そして実際にトゥトゥニエの上で身体をからめて寝る姉妹たちの姿は動物のようなのだ。

三十分後に、彼女は動物が味わうような半醒の睡眠の中、横たわっていた。眠っているアリスは、コロンプが戻ってきた時、片方の腕を広げた。アリスには、自分の長い脚が折り曲げた膝の姿勢で、もう一方の同じような脚と合わさっているのが、かすかにわかった<sup>22</sup>。

姉妹同士脚を重ね合って寝ているアリスの眠りは、動物の感覚として描かれている。

夜明け前に、彼女は華奢な身体の侵入によって起こされたが、それはひそかな声で泣き言を言い、忍び込む動物のような巧みさで、破れた大きなカナペに滑り込んできた。

「さあさあ、なんなの、とコロンプが不満を口にした。そこにいるのはあんたね。せめて向こうの隅に寄りなさいよ。あんまりアリスを起こしなさんなよ。足で私たちをひっかかないでよ。」

アリスは一番若い妹の存在に知らないふりを装い、おそらく最後に、もつれた四肢で守ってもらうことを、雑魚寝という野性的で純潔な習慣を求めてきた丸まった身体を少しも感じていないかのように振る舞った<sup>23</sup>。

妹エルミーヌが二人の姉妹の眠るトゥトゥニエに潜り込んでくる姿は、「忍び込む動物のような巧みさ」、動物の敏捷さを備えているのだ。妹はさらに動物のような長く鋭い爪で姉たちを引っ掻いたりもする。「動物が感じるような愛情」を持ってトゥトゥニエの上で生まれた姉妹達は、大人になってそこで寝る際もその幼年時代を辿るようにして動物に似てくるのである。

<sup>20</sup> *Ibid.*, p. 1435.

<sup>21</sup> *Ibid.*, p. 1411.

<sup>22</sup> *Ibid.*, p. 1402.

<sup>23</sup> *Ibid.*, p. 1437-1438.



### 2-3 乳房

トゥトゥニエとは、姉妹達で共に過ごした幼年時代の郷愁を誘う「安全」な場所でありながらも、不安定さが併存している場所のようだ。

けれども彼女は、トゥトゥニエの暖かい窪みにウードの四人姉妹が不安定な安全さのうちに集まった、過ぎ去った幾晩かに、親愛の情がこみあげてきた<sup>24</sup> [略]。

姉妹達のトゥトゥニエは、このように「安全」と「不安定さ」の特徴を併せ持つとある。「不安定さ」の要因に挙げられる男性の介入をアリスは拒絶する。

「ここに帰って来よう... ここに住もう。大好きなねぐらを掃除して、復活させるんだわ。私ひとりだけのために？ いいえ、彼女たちのためでもあるわ。彼女たちは帰って来るかもしれない。[中略] 私が他の誰かを待つということもあるかしら?...」この最後の推測に対して、彼女は実にきっぱり否定によって答えたが、それは見知らぬ男の存在がもたらしたであろうすべてのものへの手厳しい否定だった<sup>25</sup>。

物語の最後に二人の姉妹（コロンブとエルミーヌ）が愛人と共にそれぞれ家を出ようとするが、アリスは死んだ夫との思い出の家には帰らず、トゥトゥニエのある姉妹達の家に残ることを決意する。それは、二人の姉妹たちのためであって、男のためではないと、男性の存在をアリスは素気無く一蹴する。しかしながら、バラビという妻帯者に恋をしている姉コロンブは、男性との関係は避けられず、それによって自分たち姉妹の連帯が解体するのではないかと次のように危惧している。

—アリス、バラビと私がこのままでい続けて、何も... それで私たちのつながりが十分に確固としたものになると思う？

コロンブは笑っていたが、眼には当惑と、知らないことへの苦しさが溢れ出ていた。

—とても頑丈なものになるわよ、とアリスはもったいぶって断言した。一つの本質のつながり... より高等なつながりよ<sup>26</sup>。

アリスは自分たち姉妹関係を「一つの本質のつながり... より高等なつながり」と言い、コロンブの心配を取り払う。つまり、アリスは男性関係が継続しようがしまいが、姉妹関係は脅かされはしないし、「より高等なつながり」とあるように男女関係よりも姉妹関係が優位に立つものと強調する。また、姉妹たちにとっての男女関係の劣等性は次のようにも語られている。

[略] 貧しいが軽蔑的で、踵を返してさっさと去っていく娘たち、そして考えもなしに愛を見下していた娘たち。<sup>27</sup> [略]。

姉妹達は、男女の恋愛関係に対して、重要視していないどころか、侮蔑の態度まで示している。姉妹達は自分たち姉妹との比較において、男性を低く考えていて、とりわけアリスは男性を拒みさえする。しか

<sup>24</sup> *Ibid.*, p. 1420.

<sup>25</sup> *Ibid.*, p. 1437.

<sup>26</sup> *Ibid.*, p. 1436.

<sup>27</sup> *Ibid.*, p. 1397.

しながら一人の女としてアリスは男性と結婚していた事実がある。果たして本当に男性の存在をアリスは排除していたのだろうか。それは女性の象徴ともいえる乳房に光を当てると明らかになるようだ。

アリスはエルミーヌの腕の付け根に触り、それから乳房をさぐって握ってやり、掌にのせて量ってみた。

—あまり張ってないわ、とアリスは言った。いったいムッシュー・ウィークエンドはあんたをどう扱ってるの？ 食べるものを満足に出来ないの<sup>28</sup>？

アリスは、まるで男性がそうするようにエルミーヌの乳房に触り、大きさを量る。エルミーヌの張りのない乳房を心配し、相手の男性との関係性のうちにアリスは入り込もうとする。つまり、妹の乳房を通して、異性愛を感じ取っているのだ。では、アリスの乳房はどうだろうか。

バスローブが半開きになって、片方の乳房がのぞいたが、盛り上がりには欠いているけれども、付け根がよく据わっていた。

—私だってあんなふうだったというのに、とコロンプは溜息まじりに言った。アリスに感嘆していたのだ<sup>29</sup>。

アリスは、姉妹から羨望の対象となるほどの乳房を持つ女性らしい身体的魅力の持ち主である。

曲げた腕に寝ている彼女は、裸の瑞々しい乳房を手のひらで支えていたが、それは三十という年にも揺るがず、少し平たくとても若々しい乳房だった... 彼女は自分の考えから、寡婦くさい疑わしい貞淑ぶりを、警戒心をもって追い払った<sup>30</sup>。

アリスにとって警戒の念を抱いていた対象は男性である。つまり、「寡婦くさい疑わしい貞淑ぶり」を斥けるのは、まだ男性を魅了することができる年齢を感じさせない「若々しい乳房」を持つアリスの自信の表れと考えられる。姉妹の乳房を量り、自分の乳房を支えることを忘れない、このアリスの乳房へのこだわりは、やはり男性を意識してのことであり、異性愛的要素につながる。アリスは男性を拒絶しながらも、異性愛を完全に否定しているのではなく、乳房を介して間接的に愛を享受しているのではないか。このことに関しては後章でより詳しく考察したい。

### 3. カルネランへの道

#### 3-1 連帯の欠如

『ジュリー・ド・カルネラン』はこれまで見てきた二つの要素が含まれた特徴を併せ持つ物語である<sup>31</sup>。まず、男性を離れ姉妹の元へ帰るといふ、第二章で扱った『トゥトゥニエ』と同様、兄弟の物語の要素があるということだ。

また、『ジュリー・ド・カルネラン』では、物語の軸にエスピヴァンという男性を巡る二人の女性、元妻ジュリーと妻マリアンヌとの間の対立関係が据えられている。その意味で、『ジュリー・ド・カルネラン』

<sup>28</sup> *Ibid.*, p.101.

<sup>29</sup> *Ibid.*, p. 1405.

<sup>30</sup> *Ibid.*, p. 1437.

<sup>31</sup> 「ジュリードカルネランは何よりもまず作家の仕事であり、そして作家コレットのテーマとモチーフを通して他の作品と呼応している。(Yannick Resch, *Œuvres*, « Bibliothèque de la Pléiade » : « NOTICE » in *Julie de Carneilhan*, Gallimard, p. 1157.)

は、第一章で見てきた『第二の女』と『デュオ』と類似している。

このように兄弟や男女の三角関係という共通したテーマを持つ三作品であるが、『ジュリー・ド・カルネラン』には『第二の女』と『デュオ』の二つの作品と比較すると根本的な違いが一つある。それは女性同士に連帯が成り立たないという点である。第一章で述べたように、立場を異にする二人の女性が連帯する『第二の女』と『デュオ』に対して、『ジュリー・ド・カルネラン』の二人の女性達は、出会った瞬間から違和感を感じ、それが解消されることはついになく、両者間に連帯感が生じることは決してないのである。

そもそもかつて愛した夫による裏切りは、『第二の女』では物語の中盤で明らかになるのに対して、『ジュリー・ド・カルネラン』においては最後の瞬間まで明かされない。その最後の瞬間までジュリーは元夫エスピヴァンとの「共犯関係 (complicité)」を求めているのである。エスピヴァンは過去の借用书を用いてマリアンヌからお金を引き出そうと画策し、分け合うことを条件にジュリーに協力を仰いでいたのである。ジュリーは、エスピヴァンとの共犯関係を信じており、マリアンヌではなく自分がエスピヴァンの信頼を一心に受けていると次のように確信していた。

「[略] 彼はわたしを信頼していたのね！ 自分の妻よりもわたしに信用をおいていた...<sup>32)</sup>」

ジュリーにとって、マリアンヌよりも自分の方がエスピヴァンとの関係において優位な立場であるという事は疑い得ないことだったのだ。

ほどなく、マリアンヌはエスピヴァンに頼まれた借用书の請求の件でジュリーの家を訪ね、二人は対面し会話を交わすことになる。初めて会ったマリアンヌの印象を心の内に独白したジュリー言葉には、優越感に満ちた彼女の尊大な態度が窺える。

「[略] それに彼女はほとんど演技をしない！ 彼女は単純だ。私の家に来るなんて、彼女はきっと単純に違いない、たとえば彼女を行かせたのだとしても<sup>33)</sup>...」

これから金銭に関わる話をするにも関わらず、マリアンヌの様子は「演技をしない」とあるように駆け引きする様子は皆無である。ジュリーに言わせるとそんなマリアンヌは「単純」つまり、何も考えてない凡庸な人間に過ぎないようなのだ。ヤニック・レッシュも『ジュリー・ド・カルネラン』の解説において、マリアンヌのことを「ジュリーは一つの影そして具体性のないぼんやりとした概念のようなものと絶えず見なしている<sup>34)</sup>」と記している。ジュリーはマリアンヌを「影」や「概念」といった臍げな存在としてしか見ておらず、高く評価していないことが示されている。

ただし、ジュリーとマリアンヌの話し合いが終わり、マリアンヌがジュリー宅を立ち去ってから、ジュリーが優勢だと思われていた女性同士の関係は、一気に逆転する。マリアンヌは帰り際に、過去の借用书に則ったお金の入った封筒を置いて行く。その中に入ったお金の額を確認したジュリーは、エスピヴァンに騙されたのだと気づく。

「これで全部？ でもこれだと十万フランしかない、それに手紙はなし... 失礼なありがとうのひと言さえもないわ、私を笑わせるための天才的な詐欺師の冗談なの<sup>35)</sup>？」

<sup>32)</sup> Colette, « Romans - Récits - Souvenirs », Robert Laffont : *Julie de Carneihan*, Fayard, Paris, 2004, p.1551.

<sup>33)</sup> *Ibid.*, p. 1548.

<sup>34)</sup> Yannick Resch., *op.cit.*, p. 1157.

<sup>35)</sup> *Ibid.*, p. 1555.

お金持ちのマリアンヌからお金を引き出そうと、ジュリーはエスピヴァンと共犯しマリアンヌを裏切るはずが、ジュリーも「天才的な詐欺師」エスピヴァンから裏切られるのだ。女性同士の連帯が生じるどころか、ジュリーとマリアンヌ二人の女性の出会いが、男の裏切りの発見の契機になるのだ<sup>36</sup>。エスピヴァンは二人の女性どちらも裏切るのだ<sup>37</sup>。

エスピヴァンの裏切りによって男の存在に辟易したかと思いきや、それでもジュリーはマリアンヌではなく、最後まで男に共犯性を求めている。

「でも私は一言が欲しかった、耳を傾けるのが嬉しく、一ページで読むのが楽しい、ただ共犯の一言だけ... 彼はそのくらいのことをわざわざしてくれてもいいはずよ<sup>38</sup>。」

お金が欲しかったエスピヴァンと「共犯の一言」という言葉を求めたジュリー。エスピヴァンの裏切りを知り、電話して呼びつけて、どなり、せがんだりしてやろうかと彼に対する情念が奔出するが、最終的にはジュリーの自制が勝る。

「でも何を懇願するのか？ あたしがエルベールから受け取りたいと望んでいるものには、まだ名前がついていないのに<sup>39</sup>。」

ジュリーがエスピヴァンから受け取りたい、まだ名前がついていないものとは、むしろ共犯関係であろう。ジュリーは結局男からその信頼のしるしを受け取れないまま終わるのである。

### 3-2 金と階級

このようにジュリーは最後まで女ではなく男に共犯性を求めていることが、女性の連帯関係が成り立たなかった主要な理由と見られるが、もう一つ理由がある。それは女性たちを隔てる社会階層とお金である。社会階層とお金の有無が二人の女性を分け隔てるものとして存在するという意味で、『ジュリー・ド・カルネラン』はむしろ『牝猫』と比較されるべきかもしれない。

『牝猫』は、牝猫サアと新妻カミーユと夫アランの三角関係が主軸となっており、アランの牝猫サアへの愛情に対するカミーユの嫉妬心から夫婦関係が破綻する物語だ。『ジュリー・ド・カルネラン』にも、『牝猫』にも、人と動物という違いを別にすれば、ブルジョワ女と貧乏な貴族（人あるいは動物）という組み合わせが見られることは見逃せない。したがって、本節では、『ジュリー・ド・カルネラン』と『牝猫』に出てくるそれぞれ二人の女性の出自に留意しながら、それが女性同士の連帯の有無にどのように関わってくるのか探っていこう。

まず、貧乏な貴族を取り上げてみよう。『ジュリー・ド・カルネラン』における貧乏な貴族は、ジュリーである。貧乏であってもその故郷で生まれたということを示す自分の名前、貴族という身分には誇りを感じていることが次の引用で明瞭に表れている。

<sup>36</sup> ヤニック・レッシュは、ジュリーが「(略) マリアンヌとの遭遇の際、裏切りの発見」をしたのだと言及している。(Yannick Resch., *op.cit.*, p. 1159.)

<sup>37</sup> ジュリーとマリアンヌの出会いは、どちらもエスピヴァンから裏切られた存在であることを知る契機となったことを、ヤニック・レッシュは次のように書いている。「ジュリーとマリアンヌとの間の最後の出会いは、特別な豊かさのある一つの対話をもたらす。その対話とは、同じ裏切りの対象としての二人の女性の嫉妬と感嘆、弱さと明晰さが同時に明かすものである。」(*Ibid.*, p. 1157.)

<sup>38</sup> *Ibid.*, p. 1555-1556.

<sup>39</sup> *Ibid.*, p. 1556.

彼女は自分の名前、そのぼろをまとった古さに、九百年前から領主と同様にカルネランとしか呼ばれない頑丈な城—農園の痕跡に、自分を結びつけていた誇りをできる限り隠していた<sup>40</sup>。

貴族という家柄を持ちながらも貧乏であるジュリー、一方で、『牝猫』においてそのジュリーと対応するのが、牝猫のサアである。牝猫のサアを飼い主アランは次のように称揚する。

「〔略〕 ぼくが持ち帰ってきたのはただの仔猫じゃない。猫科の貴族であって、動物の気品というものがあつし、この上なく無欲で、礼儀作法も知っており、人間のエリートにも似たところがある<sup>41</sup>…」

アランによれば、牝猫サアはその辺の仔猫ではなく、「この上なく無欲」とあるように金銭の有無などとはや問題にしない、「気品」を備えた人間界でいうところの「エリート」であるという。まさに貧乏だが生まれのよいジュリーと境遇が重なるのだ。

では、貧乏だが貴族としての誇りを失わないジュリーやエリートの牝猫サアに対して、もう一方のブルジョワの女性はどうか。まず、『ジュリー・ド・カルネラン』のエスピヴァンの妻マリアンヌを見てみよう。

「気をつけろ」とジュリーは思った。「このブルジョワ女は私が何の話をするか私以上によく知っていて、そして彼女は私をこんがらかせようとしている。<sup>42</sup>…」

ジュリーとマリアンヌは初めて対面した時に、ジュリーはマリアンヌのことを「ブルジョワ女」と呼称する。そしてジュリーがマリアンヌに抱いた初対面の印象というのは、次のようなものだった。

「偉そうにすると、彼女はすでに少しおかみさんじみて見える」とジュリーは考えた。「肥満にかかわる問題ではない、彼女はまだほっそりしているもの。階級がないせいだわ<sup>43</sup>。〔略〕」

マリアンヌ「おかみさんじみ」た相貌は、貴族のジュリーに言わせれば「階級がないせい」という社会的地位の低さから滲み出るものだということになるのだ。

また、『牝猫』においてブルジョワ女マリアンヌに相当する人物は、女性主人公のカミーユである。男性主人公アランの新妻カミーユは脱水機製造業者の娘であり、ブルジョワ娘だ。ブルジョワなカミーユに、人間に喩えるならエリートである牝猫であるサア、このことはアランによって次のように強調される。

「サアも知っている。」

「どうして？」

彼は横柄な微笑で彼女を打ちのめした。

「どうしてって。生まれつきさ、生まれのいい人間がいるのと同じにね」

「それじゃあ、私は生まれのいい人間じゃないってこと？」

彼は穏やかになったが、それはただ単に同情したためだった<sup>44</sup>。

<sup>40</sup> *Ibid.*, p. 1475.

<sup>41</sup> Colette, « Romans - Récits - Souvenirs », Robert Laffont : *La Chatte*, Hachette, Paris, 2004, p. 1190.

<sup>42</sup> Colette, *Julie de Carneihan*, p. 1552.

<sup>43</sup> *Ibid.*, p. 1549.

<sup>44</sup> Colette, *La Chatte*, p. 1211.



アランによって、カミーユは生まれのいい人間ではないと仄めかされているのに対し、サアは生まれながらにしてカミーユが比肩しえないほどの社会的威信を誇っているように示されるのだ。『ジュリー・ド・カルネラン』のジュリーとマリアンヌの関係と同様に、ブルジョワ女であるカミーユと、生まれのよいエリートであるサアとの間に連帯は生じない。

さらに付言すれば、『ジュリー・ド・カルネラン』のジュリーは、動物であるためにお金がない『牝猫』のサアと貧乏であるという点で一致しているが、物語の最後にサアとは決定的に異なる選択をする。サアはアランの元を離れないのに対して、ジュリーはエスピヴァンから離脱し、兄レオンとともに故郷へ帰るのだ。しかしはじめのうちジュリーはエスピヴァンへの未練が残り、なかなか帰郷に踏み切れない。後ろ髪引かれる思いでいるジュリーを、レオンは次のように諭す。

—きみにはわからないだろう、ジュリー、家があってお金がないのではなくて、お金があって家がないというのは、不思議な感覚だということが<sup>45</sup>？

お金がなく家があるのが、まさにジュリーとレオン兄弟のことだ。レオンはお金がないことよりも、家がないことの方が嘆かわしいことであるとジュリーに優しく説き、ジュリーはレオンとともに実家のある故郷カルネランへ帰ることを決断するのである。また、兄弟の故郷カルネランが、自然に溢れ動物に囲まれたコレットの母シドの家を即座に連想させることは無視できない。

二人は、打ち明け話もなく、緑のからすむぎの間を通る六月の道路に思いを巡らせていた。静かに揺れる牝馬の足取り、朝の四時から八時までの冷氣、鞍のリズムのある小さなきしみ音、カルネランの低い塔の上に差し込む赤い太陽の光線を想像すると、ジュリーは涙に濡れた目を感じた<sup>46</sup>。

緑のからすむぎにはさまれた道路に、明け方から聞こえてくる牝馬の足音とあるように、二人の兄弟の故郷であるカルネランは、シドの家と呼応するかのように自然と動物で囲われている。ジュリーはシドの家を彷彿とさせるカルネランへレオンと一緒に帰っていくのだ。

### 3-3 兄と妹、兄と牝馬

それでは兄レオンとはどのような存在なのであろうか。『ジュリー・ド・カルネラン』は、兄弟が出てくる点で『トゥトゥニエ』にも類似していることは先に触れたとおりである。しかしながら、『トゥトゥニエ』における女性だけの姉妹関係は、同性間の双子的愛情で結ばれた関係が描かれているのに対し、『ジュリー・ド・カルネラン』では、異性間の兄妹であるという相違点がある。

また、『トゥトゥニエ』において女性主人公アリスは、男性を拒絶する立場であったが、全く男性の存在が皆無だったかと言えばそうではない。なぜならアリスは、どちらも妻帯者に恋をしている姉妹たちを通して男性と関わっていたからだ。姉妹を通して男性という異性との関わりがあったアリスに対し、『ジュリー・ド・カルネラン』における異性愛的徴候は、まず兄に対してあり、さらに言えば、兄レオンの牝馬イロンドールに対する愛着の中にあるのだ。そこにあるのは、人間と動物の境界が曖昧化される中に出現する異性愛的な世界であり、妹アリスは兄の牝馬に対する特別な愛情を異性愛的なものとして見ている。

人間と動物の境界の曖昧化について、まず兄レオンは、妹ジュリーにとって動物のように見えるという事実を指摘しておこう。

<sup>45</sup> Colette, *Julie de Carneihan*, p. 1564.

<sup>46</sup> *Ibid.*, p. 1456.

レオン・ド・カルネランは、それらの視線の挨拶を受けるために、妹が「自分の種族を裏切り、人間と一緒に狩りをする狐」と呼ぶ表情を顔に浮かべた<sup>47</sup>。

ジュリーは「自分の種族を裏切り」とあるように、人間に姿を変えた動物のようにレオンのことをみなしている。このようにレオンを動物として見なしているのはジュリーの側だけではない。動物側もレオンを人間というより自分の仲間であるかのように感じており、馬たちはレオンの帰宅を足音で感知し、まるで自分たちの仲間が帰還したかのようにいなくのである。

彼は夜も夜明けもともに愛していて、いつも六時前に帰宅した。すると彼の馬たちが遠くから彼だと理解し、いなくのだった<sup>48</sup>。

馬たちは兄レオンを同類と見なしているようなのである。ジュリーによって、また馬によって、人間ではなく動物として規定されるレオンであるが、レオンが異性愛的感情を抱く対象もどうやら人間ではなく、動物のようだ。

彼はジュリーの手をうわのそらで握りしめ、この世の中で何よりも愛しているもの、忠実な牝馬たちの鋭い叫び、主人の熟練した耳もとで、厚くて柔らかい唇がもらす友愛の言葉へ向かって帰って行った<sup>49</sup>。

レオンが「この世の中で愛している」のは、人間の女性ではなく、牝馬なのであり、そこにはレオンの動物に対する特異な愛着が窺える。また物語のが、レオンの動物、とりわけ牝馬イロンデールに対する親愛の情を述べるジュリーの言葉で次のように結ばれているのは注目に値しよう。

それから彼女は純白のケードルをつけた背の高い雌馬のイロンデールが、追いかけてきて、カルネランの手に熱狂的な鼻孔で接吻しにやって来た時、兄の方へ覚悟して振り返った。

「ああ！」とジュリーは考えた。「彼は少なくとも、自分が世界で最も愛するものを連れて帰るのだわ<sup>50</sup>…」

そして、牝馬イロンデールはジュリーに接吻し親愛の情を示しながらも、兄レオンの方を向くことは忘れておらず、ここでは牝馬イロンデールのレオンへの愛情も示されている。そしてジュリーの言葉にもあるように、レオンの「最も愛するもの」とは、牝馬イロンデールのことであり、物語の最後、このジュリーの結びの言葉は、レオンの牝馬イロンデールへの異性愛的感情を強く物語の最終ページに刻印することになるのだ。

一方でジュリーはどうだろうか。そもそもジュリーとレオンの動物との接点は幼少期からあり、兄弟揃って早朝からきまって父と馬に乗って市場に行くのが常だった。その市場に出掛ける際、幼い二人の兄弟は、いつも訳もなく父からぶたれることに耐えていたという思い出があり、ジュリーはそれを次のように述懐する。

<sup>47</sup> *Ibid.*, p. 1453.

<sup>48</sup> *Ibid.*, p. 1458.

<sup>49</sup> *Ibid.*, p. 1458.

<sup>50</sup> *Ibid.*, p. 1566.

台所兼浴室では、皿を洗っているのもまだ九時半にもなっていないことがわかった。そしてジュリーは、罪悪感を伴いながらも再び眠った。その罪悪感は過去に公正で手厳しい父の手によって与えられる鞭の打撃で調教されていた幼少時代から来るものだった。昔、冬は七時、夏は六時に否応なく開かれるドアの後ろで、レオンとジュリーは裸足で音を立てずに、押し合い、最初にたたかれる順番を争っていた。とにかく殴られて、ほてった頬で、彼らは穴のあいた短靴を履いて、恨みも抱かず小馬に乗り、カルネラン伯爵に追いつくためにギャロップで走るのだった<sup>51</sup>。

この引用で特筆しておかなければならないのは、レオンとジュリーは父からむちで打って走らせる馬のようにぶたれており、動物扱いを受けているということである。レオンのみならず、ジュリーも兄弟揃って動物側に属しているようなのである。

しかしながら、ジュリーはレオンと同じくらい動物に異性愛的感情を抱いているとは考えられない。というのも、ジュリーは人間の男性と結婚した事実があるからだ。そうすると一見ジュリーは普通のセクシュアリティの持ち主であるように思われるのだが、結婚する時のジュリーの言葉に目を向けてみると、彼女のセクシュアリティにも、動物性が忍びこんでいることに気づく。

そしてジュリー・ド・カルネランが十七歳でジュリアス・ベッケルという名のオランダから来たお金持ちと結婚する時、彼女は取り乱すほど深く悲しまず、漠然とこう思ったのだった。「今度の市で違うのに変えてくれるかもしれないんだから<sup>52</sup>...」

ジュリーは人間の男も馬のように変えられると思っているようなのだ。極言すれば、ジュリーは人間の男性のことを馬、つまり動物だと思っているのだ。

『ジュリー・ド・カルネラン』における兄弟それぞれのセクシュアリティの動物性を見てきたが、レオンは牝馬に対して人間の女性と同様に接しており、ジュリーは人間の男性を馬のように扱っていることが明らかになった。

『ジュリー・ド・カルネラン』において、女性主人公であるジュリーは直接的に性愛的な関係性を求めておらず、男の兄弟であるレオンが異性の動物に特別な愛情を抱いている。ジュリーは人間同士のセクシュアリティのあり方から離れようとしているが、異性愛的つながりが皆無なのではなく、異性愛的傾向は兄弟に向かい、兄は一方で異性愛的感情を牝馬イロンドールに対して持っているのだ。つまり、異性愛はより間接化、婉曲化されて享受されていると言える。異性愛的セクシュアリティの距離化・間接化のプロセスが感じられるのだ。

## おわりに

『夜明け』以降のコレット小説、『第二の女』、『デュオ』、『トゥットゥニエ』、『ジュリー・ド・カルネラン』において、女性主人公が異性愛の破綻をどのように乗り越えていくかを見てきたが、いずれの作品においても、直接的な異性愛を逃れながらも、どこかで、間接的なやり方で異性愛的なセクシュアリティを求めながら享受しようとする態度が認められた。その先にあるのは、やはり、母シドの世界なのかもしれない。母シドの生き方とは、田舎に帰り、人間の男性を拒み、自然を味わうことであった。またシドの世界とは、異性との恋愛の破局によって、両性具有的世界が享受できるようであった。『夜明け』以降の小説での女性

<sup>51</sup> *Ibid.*, p. 1459.

<sup>52</sup> *Ibid.*, p. 1460.

主人公は、すぐに自然や母シドに到達できない場合、それらを段階的に遠回りしながら求めているように見える。『ジュリー・ド・カルネラン』のジュリーとレオンが、自分たちの生まれ故郷である田舎で自然の溢れたカルネランへ帰る際にかわす会話においても明らかである。

「カルネランへ着くまでにどのくらいかかると思う？」

ジュリーは兄が初めて躊躇した仕草をするのを見た。彼は両腕をあげ、それをだらんとした。

「三週間... 三ヶ月... 一生<sup>53</sup>」

カルネランへの道のりはレオンによれば三週間、三ヶ月と伸び、最終的には一生涯と言い直しているように、一生かかるかもしれないという。自然豊かな故郷がユートピア化されており、その点もシドに似ていると言えよう。母シドのようにすぐ自然を味わうことは出来ないが、ゆっくりとしたプロセスを踏みながら、享受すべきものとしての自然への傾斜をいっそう強めているようなのだ。

——一番遠回りとして行くのさ、ジュリー。遠回りの道が一番馬や騎手を疲れさせないんだよ。道ばたに草が生えている小道を行ったほうがよりいいんだ<sup>54</sup>。」

「一番遠回り」しながら、「道ばたに草」という自然を感じつつ、カルネランへ向かおうとする兄弟の姿からも、長い道のりを経てシド的世界へ辿り着こうとしているのが窺えよう。

#### 参考文献

- Colette, « Romans - Récits - Souvenirs », Robert Laffont : *La Seconde*, Hachette, Paris, 2004.
- Colette, « Romans - Récits - Souvenirs », Robert Laffont : *Duo*, Mercure de France, Paris, 2004.
- 小野ゆり子、『娘と女の間』、中央大学出版部、1998.
- Colette, « Romans - Récits - Souvenirs », Robert Laffont : *Le Toutoumier*, Hachette, Paris, 2004.
- Yannick Resch, *Œuvres*, « Bibliothèque de la Pléiade » : « NOTICE » in *Julie de Carneilhan*, Gallimard.
- Colette, « Romans - Récits - Souvenirs », Robert Laffont : *Julie de Carneilhan*, Fayard, Paris, 2004.
- Colette, « Romans - Récits - Souvenirs », Robert Laffont : *La Chatte*, Hachette, Paris, 2004.

<sup>53</sup> *Ibid.*, p. 1564.

<sup>54</sup> *Ibid.*, p. 1565.